



「ポジション決めに同情は禁物。学年なんか関係ない。チームが勝つことを考えなきゃならないんだから」

当然のように洋太は、淡々と言った。三人は気まずいような顔をして、黙って洋太の言葉を聞いていた。

「ま、まあ……」

こころはうまく答えることもできずに、小さくうなずいた。

「ずっと先延ばしにするのはよくないよ。もうここで決めようよ」  
洋太が、言った。

「じゃ、じゃあ……」

こころが言い出そうとしたとき、

「あの……」

と、ずっと黙っていた吉井が口を開いた。

「ぼくは、だめなんですか……」

吉井は訴えるようにこころを見つめた。

(次だな……)

こころは、思った。直球が来る。一球目、二球目と内角を攻めてきたから、次は外角低め。しかも、振り遅れていることが分かっているはずだから、速球を投げ込んでくるだろう。キャッチャーとしてのこころの読みだ。

外角低めに手を出すのは危険かもしれないが、うまくあわせて、一・二塁間を抜くことができれば、二塁ランナーを生還させることができる。追い込まれる前に、カウントの浅いうちに積極的に打って出た方が、いいと思った。

勝負！ こころは、息を長く吐いてから、ゆっくりとバットを構えた。

第三球目。読み通りの速球が、外角低めに。

(来た……！)

バットを振った。ひじをたたみ、腰を鋭くひねる。シャープな振りをイメージして、一気に振り抜く。

キンツ。いい音が響いた。同時に、バットを握っている手のひらに手応えがあった。ボールがバットにはじかれて、一塁方向へのライナーとなった。

